

本県中学校における教育効果の高い共通実践

—全国学力・学習状況調査結果（B問題）の分析を通して—

高原 香織* 神里 美智子* 上原 進*
比嘉 孝司* 宮里 里加子*



キーワード 共通 実践 中学校 学校規模 全国学調 B問題 正答率 質問紙
学力向上推進プロジェクト インタビュー調査 過小規模校 小規模校
中規模校 大規模校 日々の授業実践 組織的 学習を支える力 教科

I はじめに

全国学力・学習状況調査（以後、全国学調と表記）は、「全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る」ことを目的に、毎年度実施され、学習指導の改善・充実等の取組の方法を提言している。本県では、今後3年間で「授業改善」を大きく前進させるための期間と位置付け、県全体で方向性の一つにした学力向上の取組を推進するために「学力向上推進プロジェクト 授業改善6つの方策」（平成28年12月）が示された。

各校においても、全国学調の結果を用いて自校の児童生徒の実態を把握し、課題解決に向けた具体的な取組を実践している。

本研究では、沖縄県の各学校の全国学調結果（B問題）の分析を通して、「改善が進んでいる学校」に注目し、インタビュー調査を行い、「教育効果の高い共通実践」として紹介することで、児童生徒の実態に寄り添った改善を進めていくための新たな視点を多くの学校に提供することを目的として調査した。

II 研究内容

1 全国学力・学習状況調査結果の分析

文部科学省は、8月28日、全国学調（平成29年4月実施）の結果を公表した。本県と全国の平均正答率を比較すると、表1のように小学校は全4科目とも全国平均との差が1～2ポイントで、ほぼ全国平均並み。中学校は各科目とも全国平均を5～7ポイント下回る結果となった。また、「知識」を問うA問題に対して、「活用」を問うB問題は、依然正答率の低い状態である。

全国学調がスタートした平成19年からこれまでの本県と全国の平均正答率の差の推移を図1で見ると、本県は、全国と徐々に差を縮め、小・中学校ともに改善傾向にあることが分かる。小学校においては、これまでの取組が結果につながり、今後の見通しをもって更なる改善を進めていくと思われる。中学校においては、これまでの取組の成果を確認しつつ、今後その成果を発展させていくための課題や方向性を明確にする必要があると考える。

表1 沖縄と全国の平均正答率の比較（％）

小学校	国語A	国語B	算数A	算数B
沖縄	73	57	81	46
全国	74.8	57.5	78.6	45.9
差(差)	-2	-1	+2	±0
中学校	国語A	国語B	数学A	数学B
沖縄	72	67	58	42
全国	77.4	72.2	64.6	48.1
差(差)	-5	-5	-7	-6

※都道府県別の平均正答率は、整数値で公表。そのため、差は、全国の数値の小数第1位を四捨五入して比較。

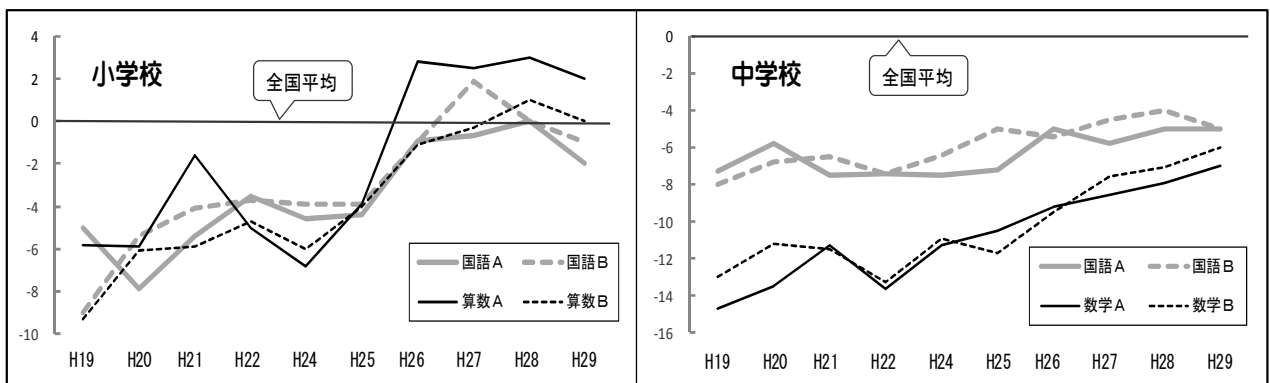


図1 沖縄と全国の平均正答率の差の推移

*沖縄県立総合教育センター教科研修班研究（指導）主事

そこで、本研究では、正答率の低さが課題となっているB問題の結果に特化して、分析を進めていく。その際、各校の実態に寄り添えるような実践を調査するため、学校規模ごとに見られる特徴にも注目しながら分析を行う。

(1) 学校規模によるグループ分けについて

全国学調では、学校質問紙調査の回答等から、本県の中学校を3つのグループに分けている。この分類から、表2のような学校規模のグループ分けが推察できる。表2を基準とすると、本県は小規模校が57%を占めることとなり、本研究が目指す、学校の実態に寄り添った実践調査のためには、小規模校のグループを細分化する必要がある。そこで、昭和59年、旧文部省助成課資料「これからの学校施設づくり」による分類(表3)を参考に、小規模校を過小規模校と小規模校に細分することとする。

本研究では、県内の市町村立中学校146校(廃校を除く)と県立中学校1校を表4のように自分で4つのグループに分類する。

表2 学校質問紙調査より

規模	学級数
小	～ 11
中	10 ～ 18
大	16 ～ 26

平成29年4月18日現在

表3 旧文部省資料より

規模	学級数
過小	～ 5
小	6 ～ 11
適正	12 ～ 18
	19 ～ 24 ※
大	25 ～ 30
過大	31 ～

※統合の場合

表4 学校規模のグループ分け(本研究独自の分類)

過小規模校				小規模校		中規模校				大規模校	
学校名	学校名	学校名	学校名	学校名	学校名	学校名	学校名	学校名	学校名	学校名	学校名
大宜味東	那覇南大東	宮古多良間(福嶺)	宮古北大東	国頭国頭	国頭今帰仁	国頭大宮	那覇古蔵	国頭名護	国頭あげな	国頭	
上本部	久高	富野	北大東	国頭本部	国頭羽地	石川	那覇城北	中頭読谷	中頭読谷	中頭	
伊豆味	渡嘉敷	川平	久高	国頭屋部	国頭東江	伊波	鏡原	中頭古堅	中頭古堅	中頭	
水納	座間味	崎枝	渡嘉敷	国頭東江	国頭宜野座	与勝	石嶺	中頭美里	中頭美里	中頭	
屋我地	阿嘉	名蔵	阿嘉	国頭伊江	中頭伊江	具志川	長嶺	中頭美東	中頭美東	中頭	
久志	慶留間	白保	慶留間	中頭恩納	中頭恩納	高江洲	糸満	中頭宮里	中頭宮里	中頭	
久辺	栗国	伊原間	栗国	中頭与勝第二	中頭与勝第二	具志川東	西崎	中頭沖縄東	中頭沖縄東	中頭	
伊平屋	渡名喜	竹富	渡名喜	中頭越來	中頭越來	嘉手納	潮平	中頭北谷	中頭北谷	中頭	
野甫	鏡原	黒島	鏡原	中頭安慶田	中頭安慶田	コザ	玉城	中頭嘉数	中頭嘉数	中頭	
伊是名	西辺	小浜	西辺	中頭真和志	中頭真和志	山内	大里	中頭真志喜	中頭真志喜	中頭	
安富祖	狩俣	波照間	狩俣	中頭松城	中頭松城	桑江	与那原	中頭宜野湾	中頭宜野湾	中頭	
喜瀬武原	池間	大原	池間	中頭神原	中頭神原	普天間	南星	中頭西原	中頭西原	中頭	
仲泊	西城	船浦	西城	中頭兼城	中頭兼城	北中城	平良	中頭浦添	中頭浦添	中頭	
山田	城辺	西表	城辺	中頭高嶺	中頭高嶺	中城	北	中頭仲西	中頭仲西	中頭	
津堅	砂川	船浮	砂川	中頭三和	中頭三和	西原東	石垣	中頭神森	中頭神森	中頭	
彩橋	下地	鳩間	下地	中頭知念	中頭知念	浦西	石垣第二	中頭港川	中頭港川	中頭	
若夏分校	上野	与那国	上野	中頭佐敷	中頭佐敷	石田	大浜	中頭安岡	中頭安岡	中頭	
久米島西	佐良浜	久部良	佐良浜	中頭具志頭	中頭具志頭	那覇		中頭首里	中頭首里	中頭	
球美	伊良部		伊良部	中頭久松	中頭久松			中頭寄宮	中頭寄宮	中頭	
				宮古	宮古			中頭小禄	中頭小禄	中頭	
				県立	県立			中頭仲井真	中頭仲井真	中頭	
								中頭金城	中頭金城	中頭	
								中頭豊見城	中頭豊見城	中頭	
								中頭伊良波	中頭伊良波	中頭	
								中頭東風平	中頭東風平	中頭	
								中頭南風原	中頭南風原	中頭	

規模別学校数



(2) 中学校(B問題)の結果分析について

調査対象147校、3年間(平成27～29年)2科目(国語B、数学B)の結果について、各校の平均正答率が、どのように変化しているのか、図2のようにまとめた。

「国語B」の正答率が3年間継続して上昇している学校は39%(57校)、「数学B」の正答率が3年間継続して上昇している学校は57%(84校)、「国語B、数学Bの2科目とも」正答率が3年

間継続して上昇している学校は33%（49校）ある。全国的にも課題となっている「活用」を問うB問題において、これほど多くの学校が、成果を上げている状況は驚きであった。学校規模別に比較してみると、過小規模校の上昇校は割合としては少なめであるが、どの学校規模にも一定数の上昇校が存在している。

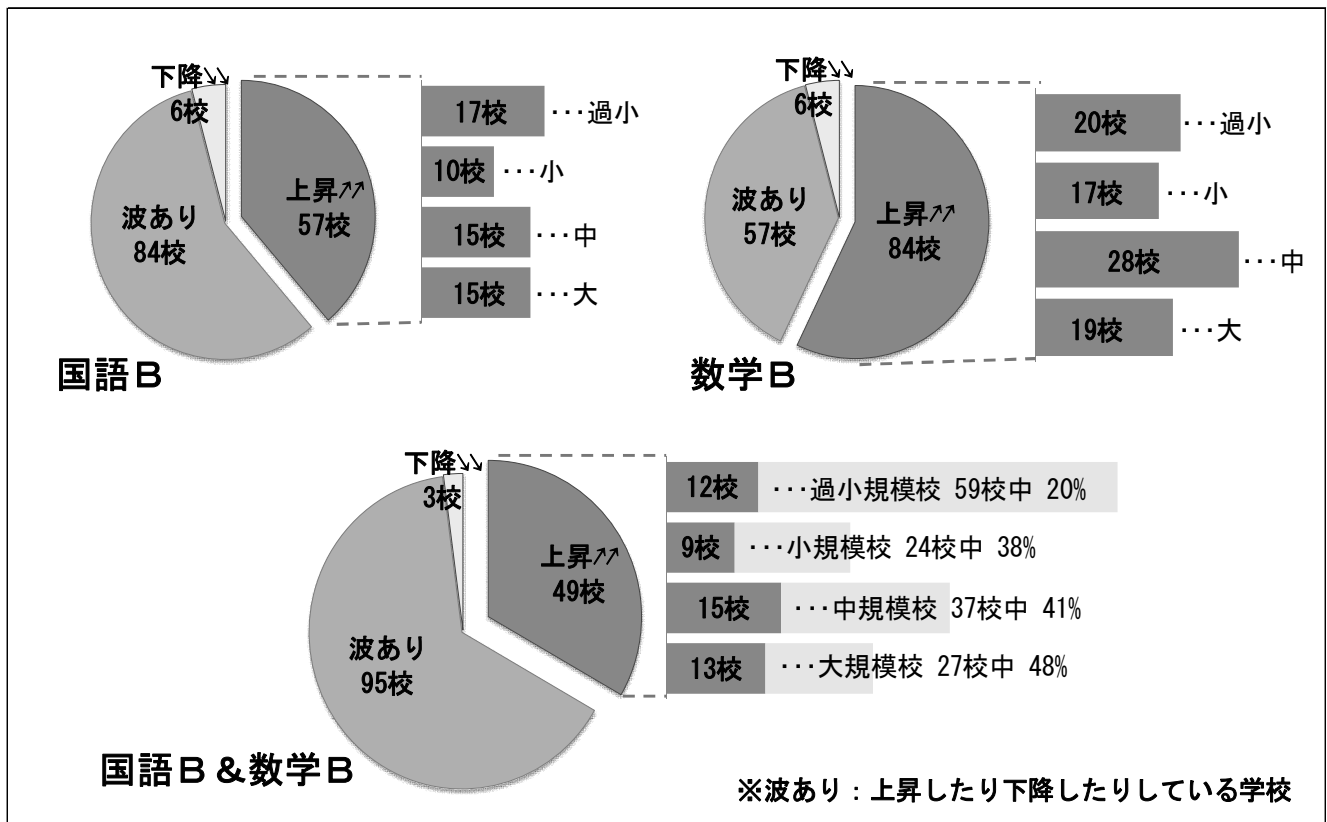


図2 過去3ヶ年（H27～H29）平均正答率の上昇校

(3) 質問紙調査の結果分析について

B問題2科目とも上昇する中学校49校について規模別に特徴がある項目に注目して分析した。生徒質問紙「学習に対する関心・意欲・態度」に関する質問項目については、「当てはまる」と回答する過小規模校の生徒の割合が高く、特に図3の2つの項目については、差が顕著であった。少人数の授業展開で、個別の対応が充分になされ、一人一人が発表する機会を多く持てるなどのメリットが活かされているものと思われる。

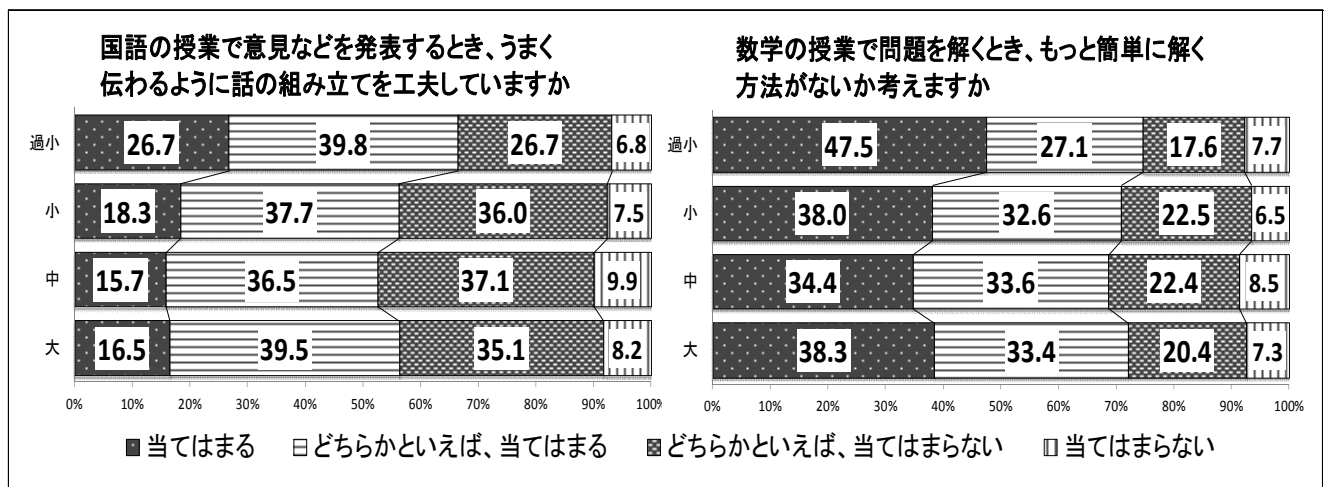


図3 生徒質問紙「学力に対する関心・意欲・態度」の領域から特徴的な2つの質問

生徒質問紙「言語活動」に関する質問項目については、「当てはまる」と回答する中規模校の生徒の割合が低い傾向にあり、「言語活動」そのものに、強い関心が向いていない結果となっている。図4に示す、学校質問紙の回答と関係しているものと考えられる。

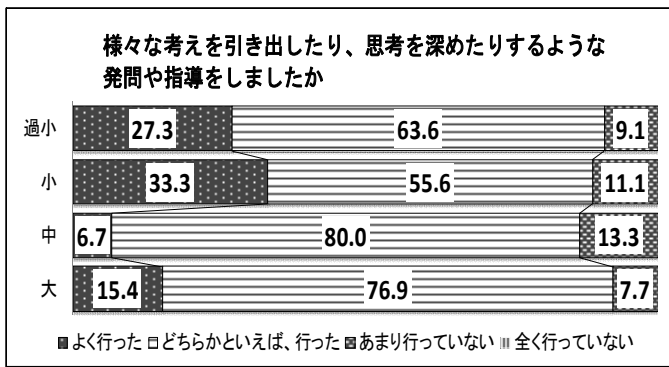


図4 学校質問紙の回答より

また、「学習習慣」に注目すると、図5に示す2つの質問では、過小規模校の肯定的な回答が目立って多かった。家庭学習の取組に独自の工夫があるのではないかと推察される。図6の学校質問紙の回答を各規模校の上昇校とそれ以外の学校で比較してみると、どの規模でも上昇校のほうが保護者に対しての働きかけをよく行っている。学校、保護者の連携により、「学習習慣」が定着しているものと思われる。

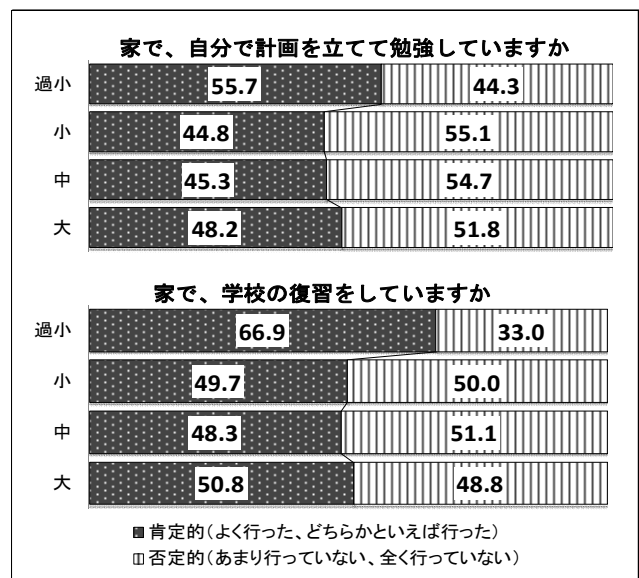


図5 生徒質問紙「学習習慣」より

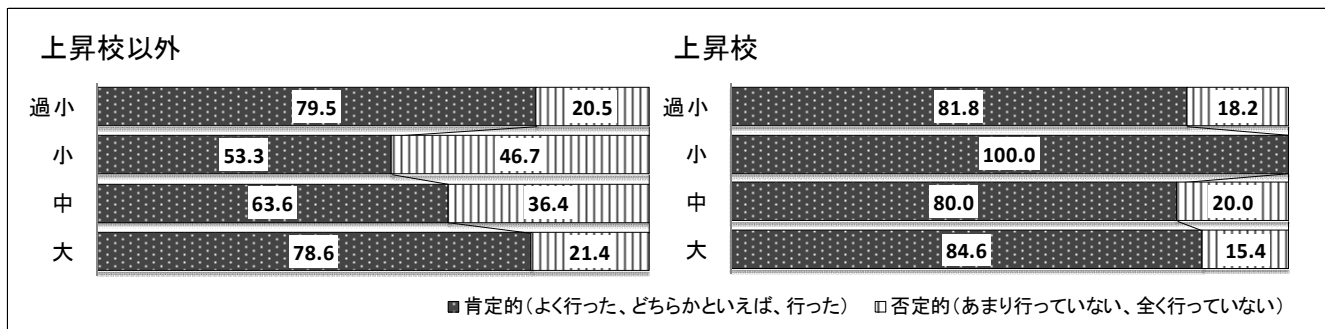


図6 学校質問紙 「保護者に対して生徒の家庭学習を促すような働きかけを行いましたか」

Ⅲ まとめ

11月下旬から12月上旬にかけて、上昇校49校のうち、13校へインタビュー調査を行った。図7に示すように、規模や地区のバランスを考慮し、対象校を選出した。

インタビュー調査したすべての学校から感じた事は「全職員で徹底して実践すること」の重要性であった。実践事例は生徒の実態に合わせ多種多様であるが、共通して「全クラスで行っている」「全職員が同じ流れで行っている」との返答が、当然のように返ってきた。ここに至るまでには、全員が納得して実践するに値する内容の吟味、練り直しが繰り返されている。新たな取組には、先生方の熱意と管理者や各組織の主任らの強いリーダーシップが発揮されている。「教育効果の高い共通実践」とは、全員が同じ目標に向かって、お互いを思いやりながら継続して実践することであり、実態に合わせ、常に改善する行動力・組織力の現れである。

学校は、常に変化する場所である。生徒・教師は毎年入れ替わり、クラス替えや校務分掌の配置換えにより行動をとる集団も変化する。今回、調査した上昇校が今後も上昇し続けるためには、学期単位、月単位での見直しを行い、変化に微細に対応して実践し続けることが求められる。

私たち教師は、個々の力量を高めることに加え、集団としての力量を高めることも必要だと気付かされる調査となった。インタビュー調査で得た「教育効果の高い共通実践」が、多くの学校で改善に向けた議論のきっかけとなり、新たな視点となることを願い、次ページ以降に紹介する。

規模	学校数	地区	学校数
過小	4	国頭	2
小	3	中頭	3
中	3	那覇	3
大	3	島尻	1
		宮古	2
		八重山	2
計	13	計	13

図7 インタビュー調査校の内訳

過小規模校

日々の授業実践を支える組織的な取り組み

○職員共通の取り組み（視覚化、統一）

- ・「日常における○校の10の実践」（教師）、「日常における○校の5の実践」（生徒）を掲示。
- ・シェア授業（小中乗り入れ授業）の実践→小中の教師でペアをつくり、他校種の視点を組み入れながら、相手校の授業をする。ペアで検討、参観、研究と授業内容を高め合う。
- ・小中一貫した授業スタイル、板書計画→「めあて」は青で書く、「まとめ」は赤で書く等。
- ・授業板書の共有→各板書を撮影し、共有フォルダーへ保存。専門外の担当者との学び合い。
- ・休憩時間の活用→30分休憩の後半10分は読書の時間。→落ち着いた午後の始まり。

○朝の活動の時間の工夫

- ・スピーチ集会→全生徒、全職員が年に1回以上発表する場を設定。担任による原稿添削、書き方指導。発表時は、ノーマイク&ノー原稿。「体験を通して考えたこと」「社会のニュース」などのテーマ例を与える。他の生徒は感想を記入。→聞く力、書く力の育成。
- ・天声人語書き写しノートの活用 1コラム視写→語句調べ、要約、感想→点検（担任）（コラムに関する課題作文を宿題にする→翌朝、教科係が回収→国語科が点検→評価へ）
- ・系統立てた朝の学習→ステップタイム日（テストに向けた自学）、テスト日、放課後補習日。

学習を支える力の育成

○家庭学習の取組

- ・1日2ページ。日付、取り組んだ時間、めあての記入を統一実施。保護者サイン奨励。→文化委員がページ数をチェック→2校時の休み時間に点検担当教諭に提出→帰りに返却
- ・提出期日に幅を持たせる→下位の生徒もじっくり取り組める。やり遂げることを重視。
- ・良いページに「ベストノート」印を押す。強化月間にはベストノート賞、親子賞などで表彰。→模範となるノートを職員室前に、数点掲示。小学生も興味津々で見に来る。（小中学校）

○補習の工夫

- ・キャッチ補習：休み時間、放課後など、いつでもどこでもピンポイント補習。→生徒の学習状況を職員室に掲示（教科ごとに○△×で）→担当教諭が補習→○になるまで→視覚化し、全職員で把握し、取りこぼしがいいよう全職員でフォローする態勢づくり。
- ・定期考査1週間前に希望を取り、部停講座（50分）、部活単位の勉強会（40～60分）を実施。
- ・週2回補習タイムの設定。縦割りで3チームに編成。チーム毎に得点化し、校長から表彰。→1年生が上級生の学ぶ姿勢を目の当たりにし、意欲を高める場となっている。

教科の取組

○国語科

- ・苦手分野に時間をかける ・全員群読、ペア読み ・授業スタート時の「漢字テスト」
- ・振り返りの発表（考えをまとめ、文章を組み立てる）・小学校との情報交換の場を設ける

○数学科

- ・教材、発問の工夫 ・Webテストを活用した授業計画 ・ジグソー法を用いた授業づくり

小規模校

日々の授業実践を支える組織的な取り組み

○スタンダードの共通実践を徹底させる工夫

- ・「〇〇中学校授業スタンダード」「授業の心得6か条」など、各学校の独自の取組内容が、いつでも目に触れて確認・実践できるような工夫。→週案の表紙に印刷。全学級掲示。授業マネジメントカード **つかむ**・**見通す**・**考える**・**深める**・**振り返る** を全教師で使用。
- ・月毎や学期毎のアンケート（生徒・教師）を実施し、常に成果・課題を確認する。PDCAサイクルでもって共通実践すべき内容を教師、生徒集団の両方に意識付けを行う。

○校内研修の充実

- ・全職員参加の研究授業を3回程度、普段の授業を活用しての検証授業を1～2回実施。
- ・全職員、実践したことを形（研究集録など）に残す。→校内研修のテーマに基づき、研究実践の具現化を意識し、計画的に実践する。課題を次年度テーマに盛り込み、改善する。
- ・授業アンケートの分析を行い、個人研究テーマを設定。8月で中間発表、年度末には個人課題研究発表としてプレゼンやレポートにまとめて報告する。
- ・学校の重点目標、校内研究テーマ、学校独自のスタンダードの視点に基づいたリフレクションシートの活用→視覚化され、教師が実践する際、意識しやすい。
- ・全教師、年2回の互見授業を実施。授業研究会では、最初に、生徒を交えたリフレクションを行い、その後、教科メンバー、管理者と改善に向けて話し合う。→全員でつくる授業。

○PDCAサイクルの充実

- ・週1回4K会議（校長、教頭、教務、校内研担当）終了後、4Kメンバーで授業参観、校内巡回を行い、常に現状確認をする。そこで確認された課題は、学年、学級に下ろされ（教師・生徒）新たなPDCAに向かっていく。

学習を支える力の育成

○授業と連動した家庭学習の取組

- ・生徒会の委員会活動と連携を図り点検。保護者に毎月の状況を報告。保護者印をもらう。

○生徒会の役割

- ・学校教育目標、重点目標と連動した生徒会活動の目標を設定。目指す生徒像の実現に向けて各委員会で話し合う。学級対抗の仕組みを作り数値化、表彰。→自治的活動の育成。

○学習に向かう支持的風土を高める工夫

- ・あいさつ（語先後礼、立ち止まりあいさつ、名前を呼んでのあいさつ）の徹底。
- ・時間を大切にする意識の徹底（ベル始業、集会時の開始時間、授業タイムマネジメント）。
- ・4Sスタンダード（整理・整頓・清爽・清潔）の徹底。

教科の取組

- ・国語において「書く」を意識した授業実践を日々継続して取り組む。
- ・数学において「春休みの課題」を冊子で作成、評価。（A・B問題を踏まえた分野毎の内容）
- ・ジャンプ問題（B問題）を意識した授業実践。解答例にA・Bの評価規準を設け、A解答を目指す。定期テストにも必ずジャンプ問題（B問題）を出題し、評価する。

中規模校

日々の授業実践を支える組織的な取り組み

○教科会の充実

- ・週時程内に設定し、単元ごとの進め方、指導法、教材、全国学テの分析などを行う。
- ・全クラスで共通した授業の流れを維持するために、学年の担当が毎時間の「教材ノート」を作成し、担当全員で検討、確認して授業に臨む。
→授業の流れ、使用教材の統一を図る。知恵を出し合い、みんなで授業を作る。

○公開授業の充実

- ・年3回実施。(例：1学期1学年、2学期2学年、3学期3学年)全職員で参観後、教科毎に授業研究会を実施→他教科の授業からも取り入れられる視点を話し合い、発展させる。
- ・年2回の検証授業実施→1回目で課題を見つけ、2回目で改善する。教科で授業研究会を行う。校長、教頭も参観し、助言する。
- ・毎週、誰かが公開授業を行い、「分かる授業」「参加する授業」の視点で改善を図る。

○朝の活動の時間の活用

- ・読書を中心に、時期によってドリル学習を増やすなど、柔軟に切り替える。
- ・毎週金曜日は、5教科の教科担任がローテーションで担当する。内容は教科担任裁量で。
(例：1組数学、2組国語、3組社会、4組理科、5組英語)

学習を支える力の育成

○家庭学習の定着

- ・学校オリジナルの家庭学習ノートを作成し、所属意識を高める。表紙も学校の写真など使用。冊数が増えると「プレミアムノート」を配布し、競争意識や意欲の高まりが見られる。
- ・「がんばりノート」で自主学習の習慣を図るとともに、全クラス、「リレーノート」を作成。1冊の「リレーノート」を生徒が1日1ページずつ担当し学級内をリレー。副担任が点検。
→ノートを共有することで、教科宿題以外の学習内容や方法について学び合う。
- ・学級の「学芸係」が回収(未提出者への催促も行う)し、担任が点検する。激励のコメントを添え、コミュニケーションの場にもなっている。

○学習規律の確立

- ・ベルと共に着席。始業時の黙想により落ち着いた雰囲気の中で授業が始まる。
- ・2分前入室、1分前着席。学芸委員による入室呼びかけと、学習委員による教室内での着席呼びかけを行う。教師は教卓から様子を見守る。

○生徒会活動

- ・毎日、生徒会3役会、委員長会の実施。生徒会P D C Aプランを自主的に設定。

教科の取組

- ・振り返りなどで、「なぜなら～」と根拠をもとに文章を書く指導を行う。
- ・授業のまとめを200文字作文で書く。→「書く」ことへの抵抗をなくす。体験を積む。
→語彙力も高まり、慣れると5分程度で書けるようになる。
- ・授業研究会で、「書く」指導の工夫について話し合いの場を設ける。

大規模校

日々の授業実践を支える組織的な取り組み

○教科会の充実

- ・週時程への位置づけ（共通実践の進捗状況、テストと授業進度、指導案検討などを行う）
- ・毎月1週目は各教科とも図書館で実施→その月の単元に関連する書籍を授業で紹介。
- ・県外の教育関連書籍の活用→職員室の本棚に常置し、自由にみることができる。
→各教科に関連した内容を校長がコピーし教科主任へ渡す。教科会で共有。
- ・教科主任会の実施→学期に1回程度、教科間の取組の共有、全体の課題共有。
- ・教科テーマ（校内研修テーマに沿って）と、具体的取組を設定。
- ・週案に教科経営案を載せ、学期ごとに各自の振り返りを記入→成果と課題の視覚化。
- ・教科会を「教科研究会」に格上げし、週時程内の最終校時に位置づける。
一人一公開授業（校内研修の視点を指導案に明示）の実践。
板書計画検討会（前回）→公開授業→すぐに授業研究会（事後）（帰りの会は副担任で）
一人一発問検討会の実施→15分程度の授業場面を題材に「深い学び」につなげる発問の追求。

○授業研究会の充実

- ・小中で統一した研究テーマの設定→指導と学びを繋ぐために。
- ・「書くこと」の重視→対話的な学習の場を重視。定期考査で記述式問題の出題。

○週案を通したビジョンの共有、浸透

- ・「週案作成の意義」「共通実践事項」「学力向上推進プロジェクト」の表示→いつでも確認。
- ・「授業における基本事項」の表記。
→公開などの授業参観や管理者による授業観察の視点を明示して、いつでも確認できる。
- ・毎時間、「授業のめあて」「内容」「評価方法」を記入→自校オリジナル「週案（学習指導計画案）」の作成。様式にも独自の工夫がある。

○学力調査の分析、活用

- ・全国学力調査（3年）、学力テスト（1、2年）の結果を夏休みに各教科で分析（目標との差）
- ・全国学力調査の国語A、国語B、数学A、数学Bの分析（良い傾向、課題、対応策）
→全教科で必要な共通実践を教科担当が全職員へ説明→全教科で取り入れ、改善する。

学習を支える力の育成

○家庭学習の習慣化

- ・家庭学習ノート表紙裏に「家庭学習の意義」「自主学习で身につく力」の表示→担任が読み合わせ、内容の確認を行う。1ページごとに「めあて」「振り返り」を記入させる。
- ・教科宿題（授業と連動した家庭学習）→曜日ごとに教科を割り振って、設定。
→翌朝8:15までに学習係が回収し、教科担任へ提出。

○部活動学習会（夏休み期間）

- ・部活動を行う日は練習の前（後）に学習時間を1時間程度設定→副顧問も一緒に。
夏休みの宿題等を行う→仲間意識、学び合い、助け合いなど連帯感も育つ。

○読書活動の充実

- ・毎朝の読書活動→年間目標50冊、全類読破（0～9類）→図書委員による点検、集計